田丸先生の思い出

大　竹　みよ子（旧姓沢田）

田丸先生が助教授として東大に着任された年に、私はよその大学から大学院に入学しました。法文二号館の低く暗い入口をくぐり、長い廊下を辿っているうちに迷い子になってしまい、先生に「ここは建物を継ぎはぎ継ぎはぎ作っているから、僕らでも久し振りに来ると迷ってしまいますよ。」と言われましたが、先生の口調がごく自然で、長年の知り合いにでも話しかける調子だったので、

洗練されたもの言いをされる方だと思ったのが、最初の印象でした。

その年からヴィーデングレンの原典講読のゼミが始まりました。私はドイツ語の初級文法をかじった程度だったので、最初は先生の方も当惑されたようですが、何かの折に、御自身、大学入学時に履修するよう割り当てられたのは、たぶん成績の加減でだと思うが、中国語だったこと、それが嫌でドイツ語を学ばれたことなどを話してくださいました。

朝早かったせいか、学部学生の方が多かったのですが——余談ですが、冬の暖房があまりきかずコートを着たままだったような気がします——、先生は四、五センチの厚さのある本を示されて何年も使いますからとおっしゃり、全員に安くはない本をできれば買うように勧められたように記憶します。私のように辞書と首っ引きでやっとこさ読んでいる学生が多く、一度に二、三頁しか進まないのですが、先生は少しもいやな顔をされず、学生の訳を一文一文それは丁寧に直されました。一年やってもいくらも進まないのですが、翌年も同じように続けられ、私の在学した六年間は同じ本で続けられたと思います。先生の御指導が学生に伝わるのか、少ししか進まないからとコピーですませる人もいなかったようです。原典講読をする以上あたり前なのかも知れませんが、自分の本を持って力不足でも贅沢な気分で読むことの良さを教わったような気がします。

「総合ゼミ」（と呼んでいたでしょうか、先生方、助手の方、大学院生全員の集まるゼミ）等での出来、不出来についての先生の評価は、大部分はソフトな語り口でしたが、割とはっきりしていたように思います。「これは○○ということでしょうか」と尋ねられたりするのですが、そのつもりで注意して聞くと、先生がどう考えられているかよくわかったと思います。発表者が強く問題にしている点について質問される時は、良い評価を与えている時で、特に、発表者の主張をなぞるようにおっしゃる時はそうでした。逆の場合は大抵黙っていらしたように思います。

こうして十数年前のことを思い起こしておりますと、田丸先生にお世話になったことが次々に頭に浮かびます。博士課程進学の時の論文では大変お世話になりましたし、その後ファン・デル・レーウの翻訳のお話がありました時も、第一作で変なものを出すと以後相手にされないからとおっしゃって、それは丁寧に御指導いただきました。私としては、このようなまたとない勉強の機会を与えていただいただけで本当にありがたいと思っていましたし、私の仕事ぶりも、「あとがき」で「大学院生の○○さんに手伝ってもらったことを……」と書いていただくにも値しないものだったのに、共訳という形で出版してくださいました。

最後になりましたが、先生の奥様もとても優しい方で、一度だけお電話でお話しした時も、あなたのことはよく聞いて知っていますよという感じで、私の安否を問うてくださいました。